里見八犬傳

第八輯　巻五

へ13
709
43

南總里見八犬傳第八輯卷之四下套

東都　曲亭主人編次

第八十回

荻野井返命〳〵偽刀舊主を還る
三犬士再會して宿因重て詳表を

再説荻野井三郎は既に茶店に来會をる。祝の家臣們は對面して。姓名を告り
来由を示して。某は主君より両東使を隷られる。副使でいへども今朝も労るとあて遐く旅
舍を出れば路の程太く後れて。絆の始末を知らぜりしに幸いにして。證人あり。その故の箇様
箇様と。今来る路にて。金瘡人を見て。他が報ずる趣を。送るに寅知と
某任ていへば各々心安き處。權且這地に逗留して。越後と武藏人を走らせ。主君并に
千葉大石家へ這凶変を告て。進退の下知を由べし。勿論火急の比れば。東使
主従の亡骸は柩に斂めて程近き寺院に預け措まく欲す。這義を相計られかと。

遠 13
號 704
巻 43
明治二六年十月九日購求

大家疑心釋て然るにそも少年なる一個の乞児ふ主従四五名皆殺されい意外のなりゆきなるも
さてもとばくちふ呆れけるの多くの計り浩処の三郎ゑ途ふ送せ伴當のそも似児仆を馳て来
ければ三郎則似児仆ふ多く又郷武仆の殺られるその折の始末を尋ねて那癖者何と
いひしその名を問へるに答へ問へば似児仆頭を拾ひ答へ那乞児奴ゑ名告り
たまふれと落葉仕力ゑ佶と云て父が殺られたの折ふ紛失せしと偽り小篠之浴善光兩刀と
今初て名のるを馬加とも名告れる逆臣大記常武の親族ふてあるんぞうゑ仆
らんゆゑ是寃家ゑ餘類逃らせじと喧嘩ふ東人郷武駿奴ゑ原来這奴ら多年辯
子ふ化て俺先代の親子従類なるすく殺す果しく逃亡る大阪毛野であるんぞ。とのられ
まいとゆうれども郷武殺られた俺仆ゑ痛疾と肩ふる珍支中庸論語ふ絶る大要ふ
なるふ後ふ心も冥闇なる餘ふ覚ふ但那乞児ふ年齢十七八ゑ多くなるべくらん寝れられども
容止ゑ優婆ふられ美しく女子ふ一そまりゑ形貌ふ似げるゑ力量剽姚今牛若

ともらひつべゑ神変不思議の武藝ふ恐れ東人の猜ゼ如く豫噂ふゆゑ云る見聞
の野と狭のゑ假少女の大阪ふのゑひろとふ大家又駿ゑ思ゑ目と合ひけ登時荻
野井三郎ハ祝の家臣ふ対て那癖者の支の趣旨験既ふ分明ゑ穿鑿を
是ふ云べ。首肯ふ程もるゑふ柩のゑ云ゑ憑恐めゑ云ゑ沼ふ祝の
家臣ハ深澤と下の諏方ゑ長と招ゑ縛ゑ吻明て却三郎ゑ答ふ日今
ゆせゑふ如く柩のゑハ村長ふ執計ハせハ月の草春ゑ戍るのゑ月忽諸ゑ
刀傷人の療養ゑ下の諏方の驛長ゑ示しゑ旅亭ふ到ゑ
那癖力のゑ云ゑ遅滞ふ及べ便冥ゑ
及ゑ云ゑ寔ふ便利ゑ左ゆゑ右ゆゑ計せゑ云ゑ三郎異談ふ
けゑ云ゑより祝の家臣ハ件の支の趣ゑ茶店の主人故老の荘安通て這里ふ最多合一
のふ晨厳ゑ遣ゑ戌ゑ正吾捉て三郎と共伯ふ躰て茶店ゑ立歩く。

却三郎に別れを告げ宿所を投げて還りゆくめり。當下御武豊実の伴當ハ爲に這然に留りて主の屍骸を成るもあり又似兒介と茶店の板戸に乗せて元と舁もあり這他ハ御武豊実の両刀を推乃ハ鎧櫃を扛擔ぎ荻野井三郎を後ひて旅亭を投ていそぐ小程に荻野井三郎ハ下の諏方なる驛長に宮内を呼せ一切の次第を主僕旅舍を着ーべ夏の日越に草香ふけ金瘡人の療治ハ本驛なる醫生が來て似兒介に痍を縫ひ合どもその時に三郎ハ豊実と御武の鎧櫃を扛ぎ隨ひ那首級を換るに故の隨ひ有れば竊に心を安くし又御武と豊実の腰刀ハ若當に持せと共に彼七口ハ一箇も紛失せざりけるそ中に小篠落葉と両刀と小文吾の腰刀ハ両東使の腰に跨る御武豊実の伴當ハ小篠に向ひ三郎是を預りそ臂近に措くるさ件の三口の刀ハ御に社小文吾が竊に合を替りけれど真の小篠落葉あらねど三郎ハ初より件の刀をよくも見ず又旅路に赴くも両東使に忌嫌れて推並てゆくとぞ。旅舍を俱に

真偽を知るもなく片貝に注進状に首級并に両東使に賞しめ三隻の刀ハ別に義を記寫りける有徒ハ小三郎ハ次の日暁に身の俱たる若黨に奴隷一名を従へ注進の為越後に遣し又豊実と御武の伴當の心利るめ二名に書翰を齎し武蔵に返し大塚石濱の両城に這凶変を報まけり然ハ又東使主僕の亡骸ハ當夜深澤の村長と茶店の主人ハ柩に斂めそ近の寺院に遣し權且那里に寄せそ

あるそれより茶店に送り両東使の伴當も次の日下に諏方に聚合せり件のこと三郎に報て共侶に這留に旅宿の徒然介を遣ひ大塚石濱の両城より士卒此彼十餘名を各々君命に従ひ御に荻野井三郎が遣し豊実御武の伴當に荻野井三郎が旅亭に来て對面に君命を演非常に役義を労して却豊実御武主僕の亡骸に這地の道場に瘞むべく恙なく伴當と武器行李を受取て武蔵に還らんとしかど三郎にまこの意に盡せば是裏に服大刀自ら

豊実御武が齎したる二犬士の首級の外、小篠落葉の名刀と小文五郎の刀とを箇様
箇様と説示して、今這東西と各位を遮与まわらせて宜しかるべしと、不古い愚意ながら
かくの如き是まで片貝へ、もの日注進をなしたれば遠くそのの左右あるべし且くあの美女等玉
へとて理りを舒て留めらるる大石千葉の士卒們の口に得く共は逗留して諏方の祝が宿所に
赴いて那日御武們が枉死の折尼僧が預りし鈔とを述べかねるさの那深渾なる村長許立
寄りて則長を安内にして御武豊実主従の柩を寄せて寺院に到りて住持に来
意を演べて件の主僕を埋葬をなす。炎暑に亡骸腐爛して臭
氣鼻を向けられぬ。主僕が痛く検視をなすに及ばず寺に此れ銀を布施して諏方に旅亭に
来たり左右なる程に片貝へ遣はる。荻野井三郎が伴当と共侶に執事由充が脚力
到来して大力自祝前の下知状あり。三郎これを受戴して謹て閲するに豊実御武枉死の
うへの荘介小文五郎両箇の首級并に小篠落葉二口の刀を荻野井三郎に預け遣せ。

御武が枉死の顛末

そが尽く武蔵へのぼるべしと。大石千葉へ贈るべし。這他のもの徒々と最詳に載られれば三郎
既にその意を受て千葉大石両家の士卒に件のように演ぶて祝の宿所に使を遣し武
蔵へ赴くべしと報じ西家の士卒と共に次の日旅亭を出けり。その時倪介が金瘡の
果ねども杖に撞り朋輩に扶けられて辛くして歩くめるれども然はその不便なるを
ねど那二犬士の假首級を御武が荘介小文五郎が瓶子酒と合せ葉で温湯に入れ易こけるを
ばとでも炎暑の時なれば初片貝を出でより二十日ばかりを歴ぬれば漸々に腐爛して臭氣
堪がたくなれども路に棄ていさらば必ず猶そが尽に辛苦して連れ路次のうちに
のもとに出るのから那伴当們を丁寧に誡めて荻野井紋
州豊嶋郡大塚の城に来着せしの日千葉士卒們に主君に申べて荻野井紋
待んとて御武が伴当と倶に石濱へ還りけり。小程に荻野井三郎が大塚の城に着しかば
仁田山晋五出迎へて對面して長途の労を歎待態大かたならず登時三郎が籠大刀自

と贈来さゞ。大川荘介が首級のみ。大田小文五が刀のみ。君命と偽て来意を示す。豊
実郷武が枉死の顛末。郷武が奴隷似兒介が口状の箇様々々と具に告げ。又の名を曇華
片見殿の沙汰とて。件の首級を小瓶に斂め。美酒に浸されけれども。略そ不慮のものを
来て。滞逗一旬にあまりぬれば。炎暑酷しく折れば既に腐爛の臭氣あり。憚り畏れぬ
れど。主命なれば持参せり。これらの趣左も右も宜くゆえあるさまの。慇懃に演述て
首級を斂め。一箇の小瓶と那腰刀を恭く。晋五に遞与して。又の名を某は且退りて。石
濱殿へ速に稟上。死主命あれば。あらん返辞を那首の次に。某は自由の至りに
とも。石濱の使者馬加生の丁田生と共侶に。枉死のよりて両所の使と兼て某奉り那首
へも贈らん。首級あれば遅滞なく。あの三人をかとに晋五が留難て。僅にその
意を儘せば。三郎が遞く。伴當と俱にて石濱の。千葉の城に赴く。家臣椎嶋連に
就て。君命と演ると。通て前條に異なる。首級を斂め。一箇の小瓶と那両刀と含ん

だるを。仮連に遞与まゐ。連はこれを受とて。馬加郷武が枉死の折速に報られる。狡びを述
べて。且休息まゐとて。猛可に旅館に宛行ひて。人を隷け酒飯を薦めて。荻野井王僕と
曇待けり。恁而荻野井三郎が。その詰朝正廳に召出て。千葉自胤に見参。原是通
家の使者なれば。佶と。儲いなけれども。近習の家臣衆。狡主の後方に侍りて。當下
自亂。先大刀自の安否を詰ねて。猿嶋連がその事を。今番岳母御前より遥に贈
ぬるを。大田小文五が悔順の首級。太々さまで腐爛して。半髑髏なるを。連が稟ぬるを
今ゆく実検の沙汰に及ぶ。件の大田小文五が孤も亦幼年。故猟の折に。その頸舊の
でゝふあらば必鳥刑首まべるを。遠路と。暑氣の折逆旅に不慮の拒障いで来て。逗留日を
経さんは如右なりけるもの。以ての使の過失なるべし。又贈られ両刀は昔年這里に紛
失たる。篠落葉にあらぬ。馬加郷武が庁見殿に。詐て折鑒定をさるゝ。これども那
名刀の亡てより。許多の年を歴て。これば郷武が疎忽に。認違へる狡なるべし。因て贈ら

其一両刀はあの侭返し給へ。片貝殿へあれらのよし。具さ申さあげ給べ。又馬加蠅六郎御
武の緊要の使ひ立ぬ。敬ふく悲人を斫棄て。遂ひ又悲人の為ひ殺されは是不肖あ
所為へ那折迄なる伴當も後れてその期あるぞとふ若黨奴隷も共ひ罪あり。這度の異
日ひ沙汰せべ。帰北の折件のよしも。執支へ通達せられよか。遠路の使太儀ひあそと思ひ
労いと。帰国の暇とのたまふ。爾なる二旦の。刀を返されけり。低て能歩とも家臣猿嶋
連れ。片貝の執支由充へ連署の状を遞与せ。二郎氏を受取て又大塚へ赴くひ城
主大石兵衛尉憲重八両管領と長尾景春と和睦の一議あるひより乃者五十子の城ひ
在り。子息左衛門尉憲儀へ聊中暑の恙あるを。則仁田山晋五をそ返答の趣を石濱
多多自瀧の口状と異ふ。首級へ酷く腐爛して鼻首ぞ多くるゆ。并ひ贈らるー那
刀を。敗上社平が親族多甲乙ひ。社平ガ刀にあらぬよう。喜びの勘ふべ。返して刀を
返晋ぞ。その餘へ書中ひ載せられゆ。執支ひ届けのれと。演て憲儀の自筆を由充ひ与

るゆ。偖間一封と件の刀を遞与けり。元ひ三郎へ大塚の城を辞去て。伴當をそ。這
夜へ藪地。各ぞ退散て這首ひ宿投り。那首へ憩ひ。ぞ。則ち日ぞ。水月の某日ひ越の
片貝ひ帰着て。執支稲戸由充ひ。郷武豊実へ。在所の顛末。石濱大塚二所の回報を
言詳ひ告知て。大石憲儀の自筆の書簡と。千葉の老黨ぞ連署の状と。那返された
三口の刀を。出て由充ひ遞與けり。登時津衛由充へ刀を視て。書翰と。披ぞ。怪むべく
疑ふべ。ヨメ。然らば。ぞ。夜裳を更め書翰を携へ。遽く出仕へ。却老夫
人ひ見参て。荻野井三郎ガ。石濱并ひ大塚より。刀を返される。緯の趣自瀧
憲儀の返答を。箇様々々と。ぞ。通の書翰。ぞ。大方自へ。訝り。
津衛其首ぞ。讀むべ。ぞ。讀て。聴て首級の火付者ひ。傷られへ是非ひ及ぬ
ことぞ。那刀へ相違と。返されるの本意を。顧ひ自瀧へ。ぞ。那折郷武豊実
よくも認られ生。堅定と。信る故ひ。貴ぞ。ぞ。堅達へ贈遣たりけると。疎忽の所行ぞ

とおもへバ最悔しくも恥しけれ現馬加御武ハ落葉の刀を試さんと見もて研て見るに軽る
まで鳥許の白物なれバ浮薄の性も知られず豊実とても亦介之那们が殺されて為体れ
御前に出てる王塚々後に出すと少年の見尖阪毛野ありけん石濱の其頭の詮
議のまごつきし狄ハふぞぞと向れて由充さんハ石濱ゐても大塚にても御武豊実が枉死せる
俱に是不覚の罪あり那折逃る若黨奴隷も後日に御沙汰あるべしと仰られハ他
们ハ御内の人なれバ左も右もなるべし。縦那少年等の見が大阪毛野なりとも戦国割居の今に
あらで信濃三界北陸南海限もなく所在を渉猟て搦捕せんずるハいと難き所行
なるべし。就て昨今世の風声を傳ぎいてま御前に誅戮せらる。犬川犬田両勇士ハ真の荘介小
文吾なれバ武者修行を做まめて那名を窃稱して人を欺き渡世の資助にせしものならん
故に搦捕られて首を刎られたりと云世評もなきにあらねど倘寔なるべハ二口の刀の相違をなる
も理りなしとハいへど実其是等に誇宣せバ大刀自害ハ呆果てあらバ刀のなきにて荘介も小

文五も贋物なぞありける欤その風声ハ外聞よろしからぬものなれバ刀を奪て向後を佗と蔵めよ返
されたる二口の刀ハ再び見るも忌しきに津衛介に取せべし又荻野井三郎が今番の計ひ神妙
なりと然けれども労せしの功なきを争何せんあるまじき白井殿へ影春をより向れまいに告ぐもあれ。
秘めよと其ほ示して初由充が諌し折用ひざりしを今さらに後悔の色見えおけり。然而由
充ハ宿所に退りて独窃に思惟るに今番石濱大塚殿より返されたる二口の刀ハ俺が
いぬ可比荘介と小文吾に贈りし刀なり什麼何の間に引替て那二犬士ハ其身なくの刀を抜取
もとく走りけん必是御武们が殺されし折に二犬士の料なりしを遺際して四下まへなる者より窃に
刀を合易る欤又裏に二犬士が別に臨て俺们は両刀の再手に入るとあらバ便に就て這刀を
返しまゐらせんとありけるを要る言ぞと思ひしにその言と行ひと違ハで這里に返されし刀ハ俺亦
料らずも荒夫人より賜りて復俺が東西にありけるハ嗚呼奇なるかな奇なりける哉就ても二
犬士ハ神物ありて詭なるの欤凡人ならぬを知るべきのみさてもとぞろに人に告ぐべきにあらねど。

あの段の本文
これより下巻
十五張
なり
荘介

小文吾

只肚に問ひ腹に答て感嘆の外なかりけり。案下某生再説毛野荘介小文吾は那日晡時の比及に青柳の驛なる歇店に宿りを投め浴湯飯をたうべ果て圓居しつゝ過去未來閑談數刻に及びぬる折から宿りを倶にせる旅客もなかりしに昼ハ畊し夜ハ糸を繰る奴婢們に暇あければ夕饌果て寄も来ず。そゞろぶりなる待態の疎なるも大士の與には却て幸ひと思ひける。小文吾先毛野に對ひて曩に墨田河にて別れて折毛野が乗たる柴舟に趕着んと思ひて。そが侭水中に跳入りて波濤を凌ぎて泅ぎながら舟快ければ竟に及ばず河上より漕きて来ぬる別船に身を寓せて料らず依介に遭ひたり。又市川より行徳なる毛野を索ねて鎌倉に赴きしより後も又艱苦を経て越後の小千谷に旅宿せし折荘介に環りあひて又次団太并に磯九郎が見物牛の酒顛二船虫が且荘介が智勇に挿れし酒顛二并に手下の兇賊を鏖にせし又片貝の大尼難稲戸由充が好意にて死を免れ且又趣ぞ千葉大石の両東使御武豊実がうへに首より尾まで一事も漏さず説示して和君を

亦那折に何処を投て走りしたる這信濃路に流落ひ。盤費竭たる故なる欤と問まくく毛野ハ頭を掉て俺身ハ盤纏乏からねども其故ありて小児に形貌を窶せしハ石濱の追捕を免れて親の仇なる縁連が所在を索ん為なり。曩に墨田河の頭にて那柴舟に乗りし折風波高く潮快ければ舟を返すよしなく及ばで水際に立し和君らの心にかゝらげるにあらねど勢ひ既に其術なければ流に儘し艫を操りて走らすること五里あまり羽田の浦にて舟を捨て舊里なれバ相模なる大阪村に赴きて願成院と喚做る山寺なる住持の僧ハ俺母の叔父なりければ窃に其里に身を寓せて躱処ること三稔なりしかど諸国をも巡りて寃家を索ねて斃すを果さねど其心の已ざるかなしと住持の允しぬる故ハ空しく光陰を過せしに去歳の十二月某の日に住持の遷化ありければ中陰闋し這春のはじめに寺を辞し去て京師に要時旅宿をして又引返して岐岨路より諏訪の邉に露宿して日を弥りしも亦以なし寃家の面を認らねバ環りあふとも名告ずばいかにして斃すことをうべきや世に人の力の及ばざるハ心械

盡と神佛の冥助を祈らば成とあらんと。思まよひて処々の神社佛閣に毎日祈念を凝
らすことなほ。かゝる日諏訪の庄頭に龍山と呼ぶ村あり。寛家の姓氏と相似たれば。あるを逆
東大縁連の苗字の地なるべしと思ひ。人々あの支度當日を諏訪の神に祈り。權且那果
存ぜるに。思ひもよらぬ空ぶしに。思ひ入りけれども和君は環會のこれ。此彼共は一對の痣と
又玉との八過世の契を知るに足れり。然れば是は優の恋。這里に聚合一二人の外に同因
果の弟兄あり。とのたれは什麼誰なるぞ。是等の辨の本末を知らんのみかとのたまふ。壯介
膝を找めて。約八名を。天縁の。天縁の。熟世ゆるに方絶。同因果は弟兄の和君を加へて七
名あり。その人々は徒らに信乃道節なる現八親兵衛なり。皆その素生本貫出処を詳に說
示して。信れば這七名の當に異姓の兄弟たるべく。俱に里見の家臣に。過世の年の因縁
あり。その故は箇様々々と。伏姫の自殺八房の犬のこと。金碗大道、大のこと。并に蜑崎照文の
こと。山林房八と姉真沼蘭文五兵衛のこと。濱路の世四郎音音力二尺八曳を皇節は

こと。忠信孝烈節操義侠の行状各差あれども。ともに沒ぐれた良善の支の駆異奇怪。
と次第文系ある長談佳話に小文吾も亦語を継て。その足ざるを補ひ。言の要果し夏の
日。ものうさもそくも草春く短夜の更もく鐘は響くと。聴漏さとく額を鳩め。毛野を連
ふ感激きく。或は哀に或は歎に或は微笑に或は呼く千態萬状これゆもあるべし。慷慨
嗟嘆に堪ざりし。身に摘く知る懐舊の感涙眼包に餘りけり。

第八十二回

穂北の驟雨に礼儀 行裏に喪に

青柳の歌店に亂智詩歌を題を

登時小文吾又いふ。俺ども秘蔵の玉の原是里見治部大輔義實朝臣の乳息
女伏姫上の臨終に。死衣領に掛させ給ひ。水晶の數珠に。その數珠の八箇の玉。姫上
富山に自刃の折光を發ち蜚颺して。件方へ比低々の。ふよりて役行者の示現ある旦感得の神物を。就中八顆の大玉は。仁義礼

犬士の宿因
看官既に知る
知るとは
見えを知る
毎ホ丁寧
反覆
説ずるとも
つの同じ
滸西遊ホ
ホ是一部
雑劇

智忠信孝悌の八人の文字あづかり見れば皇裔の苗裔なる旧里なる在り時、大法師に避
近とこれらの縁故を聞知りたり。伏姫の世を去りあひ長禄二年の秋ホと。今茲文明
十四年壬寅の夏までの星霜二十四年を歴さり。信れば俺們七犬士の未生以前なりと
、大法師い當初金碗大輔うり時、伏姫上と妻せんと義実思食うりしをぎ披露ホ
及ざり。長禄元年ねるかと伏姫富山に入りて遂ホ身まるめ金碗生の姫上れ
苦提の為に祝髪と。法名、大と喚做う関の八州を行脚と失う玉を索んとて飛
錫ホ年を歴る程ホ今より五八年前文明十年ね夏の比大塚信乃犬飼現八某と倶ホ
二名件の法師と蛮崎生ホ料らず名告あり折、大法師の索る玉い是俺們が幼稚な
時ホ感得まる玉なり。皆その玉ホ見れる文字ホよりて知られうり又只這玉のみゆもあり各
その身ホ痣あり。形牡丹ホ似うり。那八房の犬の毛色ホ類りたんとのられうり。然れば各あれ
同因果。犬士八名あるべきもの伏姫上の犬士の與ホ過世の母ともまうしたる縁故と詳ホ説

諦されて世ホ大諸侯ヨリとのたも犬士い必里見殿ホ仕ふる由緒明證あり。義實御父
子い士ホ賢と愛まる明君八誘ひ安房へ相伴とられ給れどその折、犬江親兵衛
と倶ホ四名のみ今より這餘の四犬士と索巡りて真足せば共ホ安房へ赴き里見殿ホ仕へ
まつらん且く寛ひ給へと辞ひて従ざりけれい里見殿より賜るうり沙金とヨリて恵まとり
這後犬山道節ホ今又和君と逢れも七犬士ホ七人足らぎ又犬江親兵衛い山林ホ獨
子ホ。四才ホ成る秋七月神隠しとりたるホ。往方も知らまるうホ。那身ホ恙ホ成り
せば今茲八才ホ成るべし。這存亡を知るまでば一箇い足らぎ一箇い闕う。何の時ホ真足せん
果しなく世ホ果ぬ旅宿い只この與うり。
塚犬飼ホ、大法師ホ値偶せ折、某い大石家の獄舎ホ在り程られ後ホ噂ホた
はのみ恙而近曽石未ホ。指月院まで某ホ又道節ホ、大法師と蛮崎十郎照文ホ
環會ホとなるうえ離合ホ時ホ遅速あり。ホ人ホ久しうりぬとも犬士ホ真足あく素

懐と遂る日をうしなふ。郷里の進退火急なるに。玉をとりまくる。暇あらざる。俺們が秘蔵の玉は出
処各異なれども皆幼稚の時感得きたる。その趣は佐々呂母の胎内より。握りて生れ出たりし大江
親兵衛のもとを大江大田が任れば。小文吾は最細しかれども某は俺がこの。獨大阪生の秘蔵玉
なるぞ。如何と詳かはせば。そもいかゝ。なるぞ。且俺們が秘蔵の玉より。ものさまの。
はて。小文吾と兵伯が護身嚢の紉鮮なる。玉を取出でゝ渡せば。毛野は徐ら両箇の玉を。
掌に受載て。燈光に寄て熟視るに。現此彼一對にして。但その文字同じかるべき義の字なり。
悌の字なれども。彫ものゞ。鮮明なれば感きまして。大々こゝろ。先這両箇の玉を返して。遽く衣
領を探りて。そもそもいかに。一箇の玉を。荘介と小文吾は迭代に受て。これは這ゆゑ智の字
なり。玉は。通て異なれば。奇也奇也。と。歎賞きて。視果て。毛野は返すけれども。當下毛野は玉を
敏めて。甚だ這玉は。未生以前は母親の料にもとゆるゝ。俺身は
是その送頭の子なれば。月満れども。生れぬ懐孕既に三稔にして。粟飯原が家断絶ぬるを。

母は相模の足柄なる。大阪村に在りし時。黙燭時候の外に。忽然として流産に似る
一隻の光物南の方より。昼光の如く渡て。隣る。兵衛が俺母の懐中に入りぬ。世にまれなる怪異
後に吐嗟とぞ。駭叫び。慌て懐と。掻捞るに。小大老母草の実なる。紀洲白の玉なりしかば。
怪しみ。宿所に。還て。又よく。件の玉を。ものするに。玉の内に知見の字あり。是人作の東西なれば
ぎ。ものゞ字體を。倣しと。鮮明に。讀れ。必要あるべしとぞ。躰て。鍼匣に納措たりし。その
夜初更の左側に。母は猛可き産座の氣つきて。俺身を安らに産まる。爾後玉の来歴を。母の
て。寫着て。玉のゝ。兵衛が腰着の護身嚢に藏めたりし。稍物情を知る。比は。綽倍
倍と。母親の。説ふに。佐々奇特のあるべきゝ。寃家馬加常武が。嫌忌を怕れて。某を。
女の子に扮て。字育れ。鎌倉に移住て。利根園の隊に入るとぞ。既に。復雖言の
志移り。年十三に。一時父の諱の一字を取て。名を。滝智と。命せし。所得の玉に見れ
たる。文字を。竊に表せし。大川大田二兄の名無も。玉の文字に由られ。牧と。同じ。荘介小文

吾ハ共侶ハ歎頭ハ通愛ハ玉兒の由來ハ趣ハ異なれども奇ハ自他皆異なれども亦
是不思議とのたまへる王の文字を名ハ命せハ俺們も亦介るれど和君と三名のこゝろあるを
大塚成孝大山忠與大飼信道大江仁這四名も忠孝仁信各王の文字を取りたるハ
合さるを義兄弟の名號一致ハ過世の応驗求めさ成て知らぬ一大奇事ハあらじ
とゝ曾稱て已さらぬ毛野いとゝ感佩して大川生その両刀を小篠落葉と名けしも亦
是縁故あるとゝ猜と問ふと莊介少敢ず不言這刀ハ名字ハ有し某ハ只雪篠の両刀を喚
做これ刀の甑ハ家の服章なり雪篠あるハよりて然りと千葉家ハ有し時小篠落葉
と名けしなるべし篠ハ亦是甑の花號猶雪篠とハ名けて落葉ハ刀の刃尖ハ此二概あ
るべきそ如右名けしゆゑんとハ毛野亦感嘆して考ハ差べきぞ考ハ落葉の
葉ハ刃之刃の聊綱落れハ落葉と名けられと那郷武ざあるを白らをそ人を斬ると
ハ時るべく四十九木葉の零ることあるとハ誇とそ罪なる乞丐と砍葉ハ初郷武を誨

ためゆ偏と造りし僻戾なれども奇を好きより這失あり乞丐とそ罪なるを殺せば悪
戾の報ひハ覿面郷武主僕のこゝろそのこゝろ豊実も其里ハ命と隕しなり總く俗
子の似而非推量ハ徒る錯誤ヨヌくあり世の胡慮ハるんのことハ莊介領乞て那們ハ素
より手管の小人士君子の歯ハ撼るを足ハ初和君ハ這刀を爭ひ舉動ハ聊亦似る
王あり量裏ハ大山道節ハ村雨の刀のるハ入り折女弟濱路ハ枉死の末期ハ大塚ハ返せ
とのたまへと道節ハその名刀を君父の仇る定正主を近つ死て斃るんぞと思ふれハ義引ぞその折ハ
某ハ料らぬも遺際あり刀とこゝも復されそ道節と戰ひハ別れるそ往方を知らぞ
これハ是六月の十九日の夜のるの初旬乞丐徒て七月の初旬荒芽山を道節も犬士の隊なる因
果と悟りそ刀を大塚ハ返したる然べ和君ハ這両刀を亡父の故主の重宝とそ最惜をあり
某ハ亦亡親の紀念なれと爭ひも解けそ奪も返されそ恰と云恰とのたまへ忠孝節義の外を
生ぞ倘這爭ひ微り其異姓の弟兄なるとを知ぞ路人ハ為ハかゝる爭ひて和ハ和と撥造

化の配剤妙なるかな。此彼似るふあるべきを。とかくを小文五吾ら笑ひて似ずとのたまひもせず。なれとも趣同じからぬ信乃現八が許我の組敷。又某が山林房八が角觝の遂恨も。初は怨敵後々親愛を同くせと談るべし。大山大阪大川なんどあるを豈限らんや。とかくべ荘介のうち微笑して。是然之と応ふ。登時毛野は愀然と荘介小文五吾ら對へて。既に知る。大山生は君父の仇なる。定正主を殺すがごとも。君と父とを害しなる越杉駄一寛門孟玉平這両敵を殺捕へ。志を致すべし。某は馬加常武父子後類を殺すれども。父を害せし逸東太縁連をすべて殺ねば。一日も心安からぬ素より仇なれば。遇ぎて要げらける郷武們を殺す果せしは偶然之れを辟言つ。唐山の張公が竊盗と李公が細ゆるとのたまへり。鄙諺も似たりけり。何の日か縁連を殺さを。なて父を祭らんなる方も。既に心盡しを察しなとて。敷くを荘介小文吾慰めを。委細時耳筑相譚なる小文五吾は遽しく行裏を解き。金半両をとりて荘介と共侶。これを毛野に贈とのたまへり。迭に宿望ある旅宿なる。盤費を肝要なれ。某們は幸ひに住して。盤費に匱しかるべ勿論。今日より後々まで影の貌に添ふべく。進退を俱にせよとて。賄ふ所なれども。然りとても腰空しく。折々不便のるあらんかと。ちと薄義なれども。受納めなかと。ふを毛野は推林ぬそを。浅からぬ事。某も亦初より聊盤纏の貯あり。願成院主の迂化の折。俗縁あるの故を。のべ。又十金の送財を。郷高も既に。ひけらし。形貌を見ぬ。窪せしは。盤費竭る故ぬあり。ぬの美は心安らぬべし。と推辞を。小文五吾荘介は。尋親懇切に推薦ぬそを。その該ぬ。ひらんなれども。悉順ぬ。親の送財ぬ。又大山道節は。軍用の餘財あるを。分與てれも。勘らんび。里見殿より賜りし。沙金も。ぬまを用ひ果さを。剰ぬる日由元の恵れし。金もあるを。ぬを減して。宣券を加るは是。理の當然。枉て這説に隨ひ。と連りに諭して果しなれば。毛野は。ちら屈く。兼引を。件の金を受とりつ。ちら戴て。收めけり。當下荘介又ぬ。甲斐の石禾ある。指月院ぬ。大法師住持。今那里ぬ。大山道節。蛮崎十一郎も。寓居せりとて。大田を伴て。指月院ぬ。欲を。和君も共に那里到りそ。大大山蛮崎。快對面ぬ。と誘ふを。毛野は兼引き。某と。

那人々の為にハかゝる故にあらねども寔に仇にハあらで迭に親しき良友に面會の與甲斐なきを
為バ是孝を後にして義を先にするものに似たれどその義ハ折にあるべきを今番ハ死しぬるを固辞せ
小文吾側より𢙣とハいふとも理りなからず今ぞ寃家縁連の所在を探りぬるにあらねバ甲斐へ赴
きなバこれ是孝道の虧るにあらず百足の虫ハ死してその後もその倒れざるものハ助けありとぞこれによりて
るに任されバ甲斐へ赴きて料らバ仇の所在を知るよしあるべしとおもへバ且俺黨七犬士ハ里見殿の
家臣となる宿世の因縁あるものから八犬士に具足して倶に安房へ赴く日を誰か今より豫ね知るべき
某們ハ大塚大飼犬江這餘の一犬士をも索ねて竟に環りあふべく和君も寃家縁連を索ねて
本意を遂られん日ハ安房へ赴く時と知るのミ遅速の料りかたきかくの如くすなれバ這処より
石禾まで二十里に足らぬ路なるに何まれ數日のあひだ一圓那里へ赴きなバ東と辭を盡して説諭
せバ毛野ハ且く沈吟して里見殿の仁政武徳伏姫上の孝烈義侠その餘も忠臣義士節
婦の那行状を傳聞きて心裏恥かしきこの身の不肖親にもまで孝をなさず友にも信を疎かせバ

犬士の屑とならるゝ如くハ當惑首鼠両端速にハ決断なりがたし又再四尋思して明日の朝
開に誨を受んと且く等せられねとのたまへバ荘介諾ひてあらば趣理りて承妥時の程と思ひしが首夏の
夜なれバとて深けず誘就枕るべしとありて小文吾も強難でおかバ羽立のみにせん園
宅の男女ハ何の間に臥房に入りし狹立目もせざる蚊幗さへあれバ夜ハ安からざるにとゞろに二三枚の臥
薦を寝々に開きて吊緒を引て三人して吊ば六布七布萌葱の蚊幗ハ色後て八を過ぎたる
暁に枕ならべて程もなく眠りて睡りぞ就にける介程に荘介小文吾ハ憶ずも熟睡やしたりけん明る
もあらぞ臥てしが旅舎の婢妾に喚覚されて驚きながら共侶に起出んとして傍を見るに犬阪
毛野ハあらざりけり他厠へや登りけんと思ひけれバ掛念せず蚊幗の下を撥揚て出んとする荘介を
小文吾やよと喚とめて犬川生これを見よ犬阪が臥たる跡に這東西あるぞよとて見れバ五両包の沙金
なるべし。あるも是亦二包あり也とぞ荘介眉根を顰めて原来毛野ハ復雖言の宿念を遂る
まで只単身でおらんとて潜に出て行たる欤然ながら這沙金を遺されたるハ本意なるべからず

時移らバ趕留んとするに小文吾も今ハ胸安からねバ推續きて遽しく臥簟を出て心ともなく縁頬の這方に建し引亮障子をみれバ數行の文字ありけり要こそあれと共侶よみつゝ吟じて讀くだせバ

凝成白露玉未全。環會流離儘自然。めぐりあふ甲斐ありてしも信濃路に為得別れゆく山川の水。

同でもあらぬ胤智が件の沙金に相添て遺せし詩歌と精あらため焼捨る追蹤火盤の浮炭をもて寫されたり。七言二句も三十一字も拂て駈て滅したる字々あれど鮮ならねども大かたハ通て明なり。荘介只顧感嗟して犬田ハ何と見給ふぞ現に胤智ハ孝子なり既に過世の因果を悟りて異姓の弟兄八名あるを知るといへども彼ハ復讐言に宿望を果さん為ならバ飄然として立去りし。されバ詩歌に顯然たる約貴ぶも賤しも父母あれバ後に兄弟あり兄弟ありて妻子あり妻子ありて子孫あり。されバ孝悌慈愛并に輕重の前後あり孝ハ百行の基にして必後にすべからず忠信仁義も孝よりして移して廣く行ふべし。胤智かゝる義を思ふて今俺們と共侶に甲斐の石禾に赴きて犬山に對面せんとて八犬なるを[illegible]

まいて這里の旅舎にて異るとて迭に意中を盡さんよりハ身に大望ある故に自餘の犬士を一チ日も索巡らん暇ハあらじ徒るれバ宛家縁連を斷絶て後に後安く義をも盡さん為を致さんとぞ斯まではおのがまゝ逢遇離別に拘ず成とあるて團圓の時を俟んとおもふを這十四言の句中に籠て凝成白露云々と寫遺せしにハあらずや。といへバ小文吾點頭て宜なる哉毛野ハ才子なり某文辭に疎けれバ然までハ了解せざりしかど歌のこゝろハ最よく聞えて理なきにあらねど然れども既にして大かた一面ハ交を結びながら贈りし金を返せしハ面に従ひ後に識る浮薄の友と比へる族ありて毛野に似げなし恨むべしやうらむべしと繰返して呟くを荘介徐にうち笑て然るにハあらず大田生熟思へバ這金を遺されたるも亦所以あり他と咱と義を結びて異姓の兄弟なりといへども金の事ハ受て咱が意に悖らバ貪るに似て潔からず然とて金を返しても大義を破る憾あるの故に俺們が贈りし金を受納めて沙金三包を遣せしハ是贈答の禮にして他より咱に餽りし昨宵の金を返すにあらねど沙金ハ原是煉金なれバその價廉けれバ這三

包い十金の答礼ふよく相當せり。偖てを受て貪らぬ返したれども美しも破ぬ智慧勝
まてるのゐるもいあれらのゐるようせんも恨むい要るをとふてそと諭せば小文五吾會を拊く
然所て他ふ脱落いるー和殿の細注微とせば兄弟墻ふ鬩ぐとふ詩ふ似る後悔あらんを
思へばーハ愚痴痴ゐるを那大阪ゑ思慮深ゐ石濱ゆ夜討の折も文あり武ある至妙の進
退及ばずーと感せーと忘れて腹を立ゐるをゆ可笑ーゆれけめと陪詰れば荘介合笑く
人ちのゐるゐ所ゐ膂力ハ大阪和殿ゑ及ぶを。智計ハ和殿ゑふーて大阪ふ及んゆ。八行の内中
智の字の主ゐるゐ応験のゐゐゐを。偖れば且く度外ゑ措て甲斐の石禾へ赴くべーとふふ
小文五吾然ゆりと応へ。遠く縁頼ゐるを戸を推開ハ漱ゆ。身仕衣ゐる程ーもあらを。旅
舎の婢立ゐりゆ来ぬゐ。京ふ立の饌の早飯も友を受ば又這里ゑ一箇缺ゐ二椀ゆ高装
飯ふ味噌美汁掛て。それ是さへ山川の歌も似ゐ二人前ゆ。ゆまりある昏餉の料の割
箸も俱ゑ受取て胸の憂也勝也ハゐゐゐ。ゆで心ゑ包銭茶銭も添ー房賃ゆ遠ゐ与

ちていそぐ朝ゆゐ立ゆゐと荘介ハゐ拭ゆゆ障子の文字ゆ拂へ滅て迹もゐく往方も知
らぬ大阪ゑ出ハ捨ても忘れぬ。昨宵の囲坐夢ゐゐゆ覚て悔ーゆ樹影悒胸と峰ゐ雲の
集る甲斐路を投て出ていく。荘介と小文五吾ハ這地ふ毛野と相別れてあらく出道節さ
既ふ石禾の指月院ふ在ゐ。ゐゐーを知れば空たの久ゐ朝涼の需要時ゆもれ升ゐ日ふ堪
ぬ酷暑ゆ笠ふ凌ぐ俱ゑ久後ハ且休題。単表犬村大角礼儀ハ豆裏ゑ二軒・犬飼
現八信道と共侶ゑ自餘の大士ゆ素んとゐ。居宅を捨故郷ゆ離れ且鎌倉ふ赴ゆて旅
宿ふ月を累れーかゆも些も便りをゐざーかゆ。箱根山とゐ踰て伊豆駿河ハゐ遠ゐ尾
勢美濃近江城下郊外村落ゆを這里ゑ半年那里ゑ三月旅ゑ光陰送ゆ
ちゐくゆ二稔を歴ゐけゐ。當下大角ゆゐ今茲の秋ハ亡妻の三回忌ふ于ゆゐ投ゐくゆ
ゐ旅ゐれば。權且故郷ふかゐて親の墓ふ詣づく。且雛衣の菩提を吊ふゆゐ諸
国を巡るべーと尋ず思ゆーて。偖々と現八ゑ相譚ひゆを現八所ゐ異説ふ及ばゆ。ゐ感ー

かゞの年の夏六月の下澣ゝ現八と共侶ゝ下野真壁の赤岩なる舊里へかへり來て所親の宅ゝ寓居をしゝ実父母養父母及雛衣ゝ墳草茅の苔ゝ拂ひ香華をゝ向ひ念誦ゝ時の移るゝ覚ぬ左右も程ゝ秋ゆもなりぬ却雛衣の三回忌ゆゝ壁土返ゝ新道場ゝ僧ゝ取衣ゝ経ゝ讀しゝ這法華延ゝ列りなる赤岩大村なる所親永六们ゝ郷食膳の儲あり又現八ゝ親糠介夫婦養家見兵衛夫妻の灵ゝ這時共ゝ祔祭りゝ大村大飼両施主ゝ准備丁寧なりけれゝ里人總て感歎しゝ招ざれゝ結縁の道俗幾百名ゝ欲及びゝ繆果て大角ゝ又現八と商議をゝ知る大塚大山大田も東国の人なれゝ京師よりゝ西のゝ九州四国ゝ杖を駐めゝ光陰を送るべうもあらゝ今番も亦上野よりゝ武藏下總ゝ偏歴せん欲和殿のまろいらゝふぞゝと問へゝ現八默頭て某も亦念慮あり下總ゝ行徳ゝ犬田ゝ故郷なゝふゝ豆襄ゝ那里ゝ赴ゝふゝ小文吾ゝ故郷ゝ還らゝ曳ゝ單れ節の往方ゝ知るゝ絶てなりゝかども既ゝて光陰を歴ゝ那文五兵衛翁ゝ世を去りて家ゝ迹をくゝるゝ後是も亦知るべうゝ這度ゝ且行徳ゝ心當ゝ首途せん今ゝ猶豫をゝとゝ大角諾ひて二稔以来一大事ゝ遇ざれゝ舊里へ立ゝるゝれゝ本意ゝあゝ一日も先へいそべゝと心ゝ急ゝ夕赤岩大村なる所親永六们ゝ遽ゝ別ゝ告ゝその詰日現八ゝ共ゝ這地ゝ立去りゝ時ゝ文明十四年。小文五荘介ゝ青柳の歌店ゝ杖の歌ゝ野ゝ別れも是年なり。秋九月中旬なれゝ日いと短くなりゝかども寒かゝ暑くなゝ只驟雨のゝ去くなりゝ現八も大角も旅宿ゝ熟てのとも出ゝ且下野なる宇津宮ゝ五七日杖を駐めゝ彼此とゝ遊歴しゝ是ゝ江戸へ赴ゝ更ゝ又行徳ゝ到るべゝと共侶ゝ也くゝ又只一日なゝ一日とゝ未牌の比ゝ武藏州足立郡千住の郷ゝ程遠なる穂北の畷路ゝ過なる折驟雨猛可ゝ降ゝ来ゝて笠宿ゝ家も多なれゝ現八も大角も菅笠を傾けゝ直奔ゝ走りなるゝ中ゝ現八なる路の小石ゝ足を蹴りけゝ要時疾痛ゝ勝ざりけれゝ出ゝも大角ゝ二町許後れなりゝ知らゝ大角ゝ不只管ゝ走る程ゝ背ゝ駝ゝ行

木角
ぬき人

千住堤の大角二賊を拉ぐ
ぬき人

裏の結理解けて後方る地上へ碾と落るを知らで走る勢ひ七八間過て心付て歩を止めて其方を急ぎ見れば跡より来る一個の男子が先行裏を掻攫て逃んとせしを大角が偷児等と喚いひて捉ふんとする程に賊が舊来の忍地路を横ぎりて河原を投て逃走るを大角は脱さじとて蒐地を捉ふるに看官まづ必ふべし當時の千住河は河の瀬今と同じからず這河は是墨田河の枝川なれども素より是小流なれば千住河の東よりは甚は鎌倉より陸奥へ到る田畑在よりの川なれば渡し千住は到て石濱に到る又石濱より墨田河を渡して須田村に到る柳嶋に到れり長禄の江戸地図に阿佐谷今の淺草原より長ノ宮の清図に千住より阿佐谷へ以西は本街道なれば至下の村落なりと知るべし今より古の地理を論ずれば舟は契と剣を求る如くなるべし間話休題扨程は偷児は是も連ふ逃走るを河原に到ると死文當黒髭の一個の癖者最大なる衣箱を卸して堤に鵜立て當下件の偷児は那癖者を遥ふ

そこ哥を拯へと喚ひて堤に走り登りしを大角は此も擬議を噫偷児奴が其首を前に脱を略はるくんと命惜くを裏を返せと四馬の足に信して透さじを趕近着く成両個の賊は立ちとて用に合せて左右より采螺を巻て固めて打んと競ふを大角は右に受左に拄て刻に當る修煉の業法に怯されても懲ずまに左より組む一個の賊の項を抓て操返せば右より携る已前の偷児利を合るを振拂ふ郤合に弗と大村の繻子の袖城曳断る程もあらば大角は左右一度に投伏せて刀の柄を撃れば吐嗟と怕る両個の偷児立ち足もなく堤より河へ水へと跳入て浮沈り潛り共倡は泅ぐも及ばず草頭蛇の水を泳るに異ならず瞬間に立前面の岸に千本の茅蔑に隠れて法然に現れ稍大村の跡を草に後走に来る程に驟雨に逢て歌たりに登時大角は現れ出て對ひて那偷児の夏れ趣箇様々と報知して件の両個の互入を世に昼鳶と狡喚做る小賊でありけれか此彼共に投伏せて斫て棄んと刀の柄に手を撃て勢ひに怕れて河に跳入

しく。囚て倶に逃亡たるに。さるに某が行嚢ハ。初搔攫ひて走りし彼偸児奴が這処へのそ
き来にけりと思ひしに方纔窺ふにあるにこそ。郷尚に二賊と挑みて折しも蹴落して水に沈みを狭まり
らざりし那偸児が将て水中に入る時。又搔攫ひてもその見ざりしらん。這推量に違ハざれバ。輾びても
空ハ起ざと。世の鄙語に似たりける。危窮の折にも窃偸の賢しさ。手を通して魔鬼に熟ましたりと
争何せん。只這損失のミならずして。襦衫の片袖を曳ちぎり断離されてなくなりたるに。あれも亦蹴落
されし某が鉄風に吹れて水中へ自然と墜落て流れし。褄袖ハ惜むに足るものならねど。行嚢にありし金も
ありしを。那偸児さへ。俺東西まで倶に留めて喪ひしハ噫俺ながら遅鈍るき。跡に遺るハ這東
西のミ。這衣箱ハ火家の賊が先立て這里に棄たりし時そが傍にありしハ。是も亦何処よりか竊
取り駄ひ来て。要時御して窺ひたるらん。現得失ハ皆時の前面に路を得這堤なる那偸児を
趕稠る甲斐なく。東西を喪ひし主も。知る衣箱を心ともなく。会留めんに益なきと呟
く。現八然てそと慰めて。某ハ先の程雨に追れて走れば。銭もあらまし路の小石に足を

蹴かけて。異ハせも後れたり。倘初より力を勠して。件の二賊を補捉なバ。行嚢を喪ふまじきに。悔て
及ぬ事ながら。切て這衣箱の主を索て。恁々と報知しなバ。陰徳の一端にならんといふを
大角うち聴てその議定に従ふべし。その侭這里に番来て居るべく。那偸児们が回り来て再駄ふて
走のみせん。今咱が東西を喪ひしも人の東西を喪ひしも。その情誼は異なるべき。某ハ近村なる家
毎に。よしと知らして主あるとの尋ねて来なん。和殿ハ足の疼をもあるらんに。憩ひて且く等すなれ。
と相譚果て。遽しく堤を下んとせし折から。趕蒐来る地方の荘客その隊約十名あまり。
手に手に棒を携て勢ひ猛く咄と嘯叫して。既に近づく堤の頭に。大角と現八が立在たるを
見出して。ひとしく競ふて訛声高く。彼なる賊ハ那首に在り。遣るな逃すなと罵りて。前後を争ふ
血氣の荘夜走らバ。遂に二犬士をとり巻て。と合せ巻たり。畢竟件の衆人が大角と現八を
補稠たるは甚麼なる故ぞ。其ハ次の巻に解分るを聴ねかし。

里見八犬傳第八輯巻之四下套終

○著作堂手集八犬傳第八輯上帙五弓画者筆工刷人目次

柳川重信

出像畫工　谷金川

總卷淨書　淺倉伊八

剞劂　横田守

第一卷　櫻木藤吉

第二卷　原喜知

第三卷　横田守

第四卷上

第四卷下

八犬傳第八輯下帙五弓　巻の五より巻の八の下まで引つゞき近日賣出しまし

第一輯より第七輯迄再刷仕れ求れ隆覽に供ふ

開巻驚奇俠客傳第二集　右第一輯五巻を辰の春より賣出し一置仮

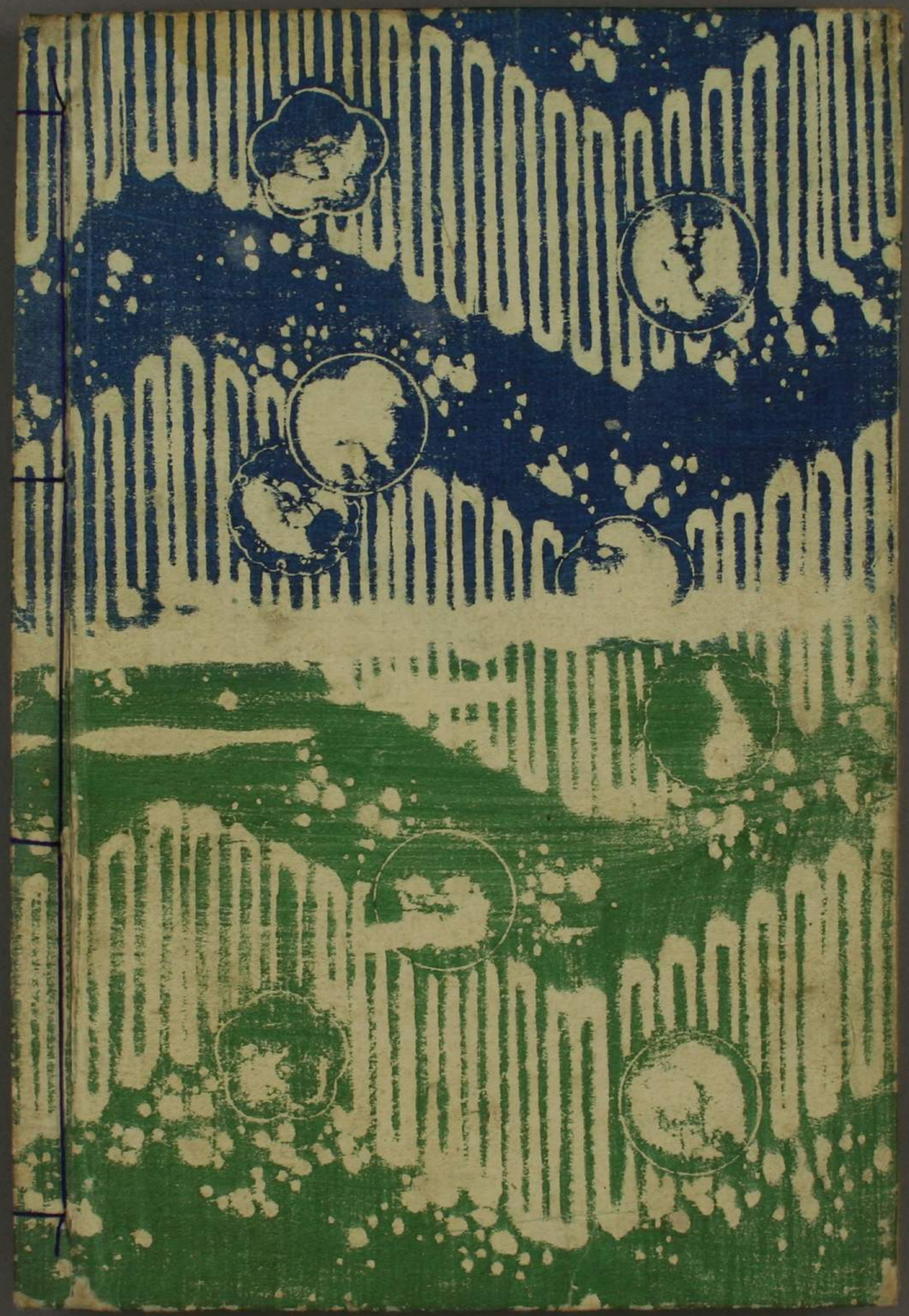
第二輯五巻癸巳の春正月より遅滯出板

近世説美少年録第四輯　第一輯より第三輯まで十五巻追々皆出板

第四輯五巻癸巳の春正月より賣出しまし

松浦佐用媛石魂録全書　前篇三巻出板後久しく中絶の所後篇七巻近来出板

前後二篇十巻全壁仕れ求御覽可被下

大阪　河内屋喜兵衛　東京　須原屋茂兵衛
同　伊丹屋善兵衛　同　山城屋佐兵衛
同　敦賀屋九兵衛　同　小林新兵衛
同　秋田屋太右ヱ門　同　丸屋善七
同　河内屋茂兵衛　同　和泉屋市兵衛
同　河内屋和助　同　須原屋伊八
同　秋田屋市兵衛　同　出雲寺萬治郎
西京　出雲寺文次郎　同　梳屋喜兵衛
同　村上勘兵衛　同　近江屋半七
同　勝村治右衛門　同　長門屋龜七
同　杉本甚助　同　三家村佐平

名山閣　東京芝大神宮前書舗　和泉屋吉兵衛發售